

ジョゼと虎と魚たち

2005(平成17)年2月23日鑑賞(リサイタルホール)

★★★★



監督=犬童一心/原作=田辺聖子/脚本=渡辺あや/出演=妻夫木聡/池脇千鶴/上野樹里
/新井浩文/新屋英子/江口徳子 (アスミック・エース配給/2003年日本映画/116分)

……2005朝日ベストテン映画祭堂々第5位のちょっと変わった日本製純愛映画。今どきの普通の大学生と身障者の女性との純愛。普通はありえないと思われる状況が次々と……？ しかし最後は……？ 自然体で恋愛に臨むことができる人は、自然体で別れることができるのかも……？ 『ジョゼと虎と魚たち』というタイトルの意味を十分に噛みしめながら、哲学的で深い内容をもったこの映画に拍手を送りたい！ 池脇千鶴の演技は絶賛モノだよ！

田辺聖子とその原作

この映画の原作は田辺聖子の『ジョゼと虎と魚たち』。私はそれを読んでいないが、パンフレットによると、この映画用の脚本は脚本家の渡辺あやが大きく書きかえているとのこと。田辺聖子という小説家は大阪弁での恋愛小説を売りモノ(?)にした作風で、彼女自身も大阪のおばちゃん丸出し(失礼?)というイメージの1928年生まれの作家だが、その経歴たるやそうそうたるもの。私にとって作家田辺聖子とは、時々新聞で見受けることがある程度の存在だが、その作品は結構面白そうだなとは思っていた。

そしてこの映画を観て、この原作もきっと深い内容があるだろうと確信した。最近はやりの「純文学」(流行小説?)である、綿矢りさの『蹴りたい背中』や金原ひとみの『蛇にピアス』などは、読んでみたものの私としては全然面白くなかった。これは、私の感性が鈍っているせいかと思わなくもないが、それでもやはり面白くないものは面白くない。しかしこんな若者の小説に比べると、この田辺聖子の原作はきっと面白いはず。

タイトルをかみしめよう！

この映画のタイトル『ジョゼと虎と魚たち』はいかにも映画的。つまり何を指しているのかさっぱりわからない、抽象的なタイトルだが、何か思わせぶり……？ この映画は、ストーリー展開の中からこのタイトルの意味を理解していくという楽しさがある。さてその内容は？ それは映画を観てのお楽しみに……。

恒夫は今どきの普通の大学生！

この映画の主人公恒夫（妻夫木聡）は、田舎から都会の大学に出てきた今どきの普通の大学生。今は大学4年生だから就職活動シュューカツも忙しいが、サークルでの飲み会も楽しそう。そして学食での友人との食事や語り合いも楽しそう。特別の悩みもなく、今の人生をありのままに受け入れて楽しんでいるようで、まさに今どきの大学生の典型。

乳母車の登場シーンは絶品！

もう1人の主人公は身障者のジョゼことくみ子（池脇千鶴）。ジョゼの楽しみは、乳母車に乗せてもらい、それをおばあさんに押してもらっての散歩。しかし、世間からひっそりと隠れて暮らしているこの2人の散歩は、乳母車に毛布をかけ、人に出会いそうになるとその毛布に身を隠してしまうという不便なもの。そんなジョゼがスクリーンに最初に登場するのは、暴走した乳母車に恐る恐る恒夫が近づき毛布をめくるといシーン。この映像のサプライズ度は一級品！ そして、何とその直後ジョゼが手に持っていた包丁で恒夫に切りかかってきた時の驚きも……。後でこの包丁は護身用に持っているものだとということがわかり納得できるが、このジョゼ登場の最初の2つのシーンはお見事！

ちょっと不気味なおばあさん！

この映画の前半の主役(?)は、ちょっと不気味な雰囲気をもったおばあさん（新屋英子）。こんなキャラは珍しく、さすが原作者田辺聖子のイメージは豊富と感心させられるもの。生まれながら足が動かない身障者のジョゼと2人で暮らし

ているこのおばあさんの人生観・価値観は明確。つまり、ジョゼは「こわれモノ」ということだし、ひっそりと静かに日々の時間を過ごしていただくの人生だと達観したもの。こんなジョゼの楽しみは散歩。ジョゼにとっては、散歩だけが現実以外の社会を見聞きできるチャンスになるわけだから、おばあさんもその必要性を認め、自分も年のせいで不自由な身体を引きずりながらこれにつき合っている。そんな2人の生活の中に、突然若い男性が入り込んできたら、そりゃ楽しいことがあるものの、ひっかき回され、混乱していくこともいっぱい出てくるはず。こんな状況設定をうまくつくり出した田辺聖子の原作はさすがにうまい！

きれいな「別れ」を描いた新しい純愛ドラマ？

この映画がみせる純愛ドラマは、見方によってはちょっと「偽善的」かもしれない。だって、今どきの普通の大学生が、たまたま知り合った身障者の女の子に興味をもち、その家に入りびたり(?)、恋に落ち(?)、一緒に生活し、帰省する途中一緒に旅行し、実家に連れていき、親に紹介して結婚(?)。そして、ジョゼが死ぬまで2人で仲良く幸せに暮らしましたとさ、とはいかないはず。まして恒夫は、就職先を探している普通の学生で、セックスフレンドも、本命の彼女もいる(?)、よくもてる男。そんな男が……？

ところがこの映画では、いかにもそうなりそうに物語は進んでいく。しかし……？ やっぱりそうはいかなかったので納得……？ そして、この2人が別れた理由は、「ボクが引いたこと」。こりゃよくわかる！ しかし、ここで偉いのがジョゼだ。普通、女はいったんこままでの関係ができてしまうと、それを容易に手放そうとしないのでは……？ だから、あちこちでは男女の別れの時に「修羅場」が訪れることになっているはず……？

しかし、この映画はきれいにこの2人を別れさせている。それは後述のように、ひとえにジョゼが哲学者だから……？

恒夫の恋愛観とセックス観は？ その1 ノリコについて

大学生生活を自然なスタンスで享受している恒夫には、女友達も適当にいる。まずは、激しいセックスが大好きな(?)女子学生のノリコ(江口徳子)。この2

人は、若い男女のつき合いだからセックスを楽しむのはお互い当然という雰囲気。ノリコも恒夫に対して男として果たすべき役割とか結婚の義務とか、そんな概念は全く関係なく、お互い楽しんでいるだけ……？ もっとも、恒夫が美人の香苗に興味を示すとそこはやっぱり女。ちょっぴり嫉妬心も示していたが……？

恒夫の恋愛観とセックス観は？ その2 香苗について

恒夫の本命(?)は香苗(上野樹里)。香苗は美人で真面目で、いいとこのお嬢さんという雰囲気の女。そんな香苗の方から恒夫に対してモーションをかけてきているのだから、恒夫としてはそれに乗らない手はない……？ そして2人は何回目かのデートの後、恒夫のベッドの上で一緒になったが、どうも香苗はセックスには気乗り薄の様子。ところが恒夫は、若いのに似合わず(?)セックスに対しても自然体。嫌がる香苗に対して決して無理強いをしないし、そうだからといって不満な様子を見せることもなく、今までどおり仲良くつき合っていた。さらに、福祉の仕事をしたいという香苗に対してジョゼのことを話してやったりまで……。そんな自然体の恒夫がやっぱりよかったのか、ついにある時、香苗の方から恒夫を求めてきて2人は結ばれることに……。このように、恒夫は恋愛やセックスに関しても至って自然体で、そのさばき方やテクニックはまるで神技的……？ こんな恒夫だからこそ、ジョゼとの別れについても絶妙のタイミングを図ることができたのかも……？

香苗は世間によくある女か……？

香苗は女としての独占欲や嫉妬心も備わっている、世間によくいる普通の女。恒夫が身障者のジョゼと親しくしたり、一緒に生活まで始めたことがわかると、嫉妬心からかれてジョゼを待ち伏せしてピンタを！ そして、「正直言って、あなたの武器がうらやましい」というすごい言葉まで……。もちろん、女同士の争いになるとジョゼも負けてはいない。「その言葉が本気なら、足を切ったら！」と切り返した。この女同士の争いの火花の激しさといったら……？

普通の映画では、ストーリーをわかりやすくするため「勝ち組」と「負け組」をはっきり仕分けしてしまうパターンが多いが、この物語はそうではない！ つ

まり、「本命」の香苗が沈んだり、消えたりしながら、結局はまた復活することに……。そこらあたりは映画を観てのお楽しみだ。

結局最後には、普通の美人の女が「勝つ」というのは何となく釈然としないが、同時にそれが普通のおさまりどころであり、人間なんて所詮そんなものだから幸せになれるという面もある。多分、私だって恒夫と同じような道を選ぶだろうと思うが、私の場合はそうなるときっと弁解の言葉をいろいろと考えなければならぬなと思ってしまうところが大きな違い……？

ジョゼは哲学者？

帰省中泊まった海ほほりにあるラブホテル「魚の館」で世界一エッチなことをした後、ジョゼは突然恒夫に対して「私は海の底深くに住んでいた」と語り始めた。さらにジョゼは「恒夫が私の元を離れていったら、また海の底に戻ることになる」と言う。そして「それもまたいいや」とつぶやいて2人は眠りに入ってしまった。ジョゼの言葉を聞いていた恒夫は、そのことに異論を差し挟まなかったのが印象的……。つまり、ここで恒夫は、よくある安モノの恋愛ドラマのように、「何を言っているんだ、ボクは一生君を離さないよ」とは言わないわけだ。これは、きっと恒夫もいずれジョゼと別れる時がくるという気持ちをもっているから。それでもこの2人の純愛は見事に成り立っていた……。この2人のきれいな「別れ」が実現できたのは、このようにひとえにジョゼが哲学者だったから……？

幸治もホントはジョゼが好き……？

小さい時に施設に預けられていたものの、「お母ちゃん、お母ちゃん」と言わなかったため、仲良くなったのがジョゼより少し年上の男の子だった幸治（新井浩文）。もちろん今は成長し、鉄工所で労働者として働く一人前の若者だが、なぜかジョゼはこの幸治の母親気取りで、何でも命令口調。幸治はそのことが面白くない。幸治が使う言葉は乱暴そのものだし、ボキャブラリーも乏しい。バカ丸出し(?)のヤンキーだが、ホントは幸治はジョゼが好きなのは……？ だって、その証拠にジョゼが家を引き払って恒夫の実家に行くとなると、「ナメとんか！」と単純に絡んでいったのだから……。しかしジョゼは大人で現実的。2人

と一緒に旅行に出かけ恒夫の実家に行くことイコール幸せな結婚を意味するなどとは夢にも考えていなかったのだから……。

ジョゼにとっての虎とは？

仲良くなり、一緒に暮らし始めた2人は動物園へ。今日は虎の見学だ。この虎のシーンは、虎という単語が原作や映画のタイトルに使われているだけあって、非常に大きな意味がある。つまり虎は、ジョゼがイメージできるこの世の中で最も怖いものということだ。世の中、誰にでも「怖いもの見たさ！」というのがあるはず。ジョゼにとっては、その怖い虎を見てみたい。しかし現実に見るのは怖い。そこで、自分に好きな男の人ができたら、その男の人と一緒に怖い虎を見るのが夢だったのだ。そして今日は、好きになった男の人つまり恒夫と一緒に虎を見ることができた。こんな幸せはない、というわけだ。何ともいいお話……。

ジョゼにとってのお魚とは？

他方、お魚とは？ これは虎の話ほど単純でわかりやすいものではなく、ちょっと哲学的で難解……？ また、虎は2人の男女が出会い、幸せな状態にある時の象徴的なお話であるのに対し、魚たちの話は、ジョゼが生まれた(?) 深い深い海の底でのひっそりとした生活に戻っていくというお話だから、男女の別れの場面に登場するもの。このように、魚たちの話はホントは悲しい別れの象徴的なお話。こんなお話が、豪華なラブホテル「魚の館」内で展開される。それも貝殻状の大きなダブルベッドの上で、天井一面に写された映像上でお魚たちが泳ぎ回る中での幻想的なお話。これも、何ともいいお話……。

池脇千鶴の演技は絶賛モノ！

この映画でジョゼを演じた池脇千鶴の演技は絶賛モノ！ 足が悪く動けないうえ、おばあさんからは「こわれモノ」と言われ、世間と接触させてもらえない娘。そんな難しい役柄を実に見事に演じている。そしてもう1つ。ちょっと不気味な雰囲気のおばあさんのセリフが不気味なのはわかるし、よく似合っているが、このジョゼのしゃべり方も絶品！ 私は今まで若い女の子が大阪弁でこんなしゃべ

り方をしている映画を観たことがない！ 男言葉ではないが、無愛想で命令的！そして、一切の飾り言葉がなく直線的！ これは、ジョゼが身障者であるため社会から隔絶された状態で育ったため、言葉やししゃべり方を知らないからではない。むしろ逆に、家の中にはおばあさんが拾ってきた本がいっぱいあり、ジョゼは毎日毎日それを読んで暮らしていたのだから、知識は豊富。包丁で人を斬りつけた場合の「ルミノール反応」とか、護身用に「トカレフ」が手に入らないとか、若い女の子に全然似合わない変な知識もテンコ盛り。さらに、人並み以上にサガンの小説とかを読んでいるのだから、そんじょそこらの大学生以上の知識をもっているのは当然のこと。そんな彼女が知らないのは、他人との距離感や接し方そしてしゃべり方。そりゃそんな経験がないのだから、それがわからないのは当たり前。そのため、それがしゃべり方にも表れている……？ しかし男女の恋やセックスについては自然に覚えるものらしく、それはそれ……？

堂々のベストテン第5位！

この映画が大阪で封切られたのは2003年12月末のことでかなり評判を呼んだが、私は見逃していたもの。今日これを観ることができたのは、これが2005朝日ベストテン映画祭第5位に選ばれたからだ。「朝日ベストテン映画祭」は、映画文化の発展を願って1958年に始まり、今年で47回を迎えたもの。そして今回のベストテンは2003年12月から2004年11月まで、関西の劇場で公開された映画の中から日本映画、外国映画のベストテンを審査委員が選んだものだ。

日本映画のトップは『誰も知らない』。その他ベストテンに選ばれた作品はいずれも話題作、問題作ぞろいだが、ベストテンの中にある「純愛映画」はこれ1本！『冬ソナ』をはじめとする韓流純愛ドラマや『セカチュー』（04年）を中心とする日本版純愛映画は、泣かせるパターンでいわば直球型（？）が多いのに対して、この映画はかなり変化球型（？）の純愛映画。しかし、堂々第5位に選ばれるだけの内容と価値がある映画であることはまちがいない。遅ればせながらこんないい映画を観ることができてホントに良かったと感激！

2005(平成17)年2月24日記